

潤一郎あれこれ

谷崎が愛用した京三味線と「春琴抄」

濃い赤茶色の木箱に収められた、谷崎が愛用した京三味線。その木箱の蓋の裏には、谷崎が好んだ地唄「黒髪」の一節と花押が、自筆でしたためられている。

1923（大正12）年9月に発生した関東大震災に被災し関西に逃れてきた谷崎は、これまでのハイカラな横浜での生活から一変し、古い歴史や伝統文化が色濃く残る関西に移り住み、作風を大きく転換させた。1928（昭和3）年、

日本の伝統の中にある「『永遠女性』のおもかげ」を、文楽の人形に見出した「夢喰う虫」を契機に、古典回帰を果たしたとされている。

その前年6月頃から、谷崎は大阪の地唄を習い始めた。祇園で聴いた地唄に感銘を受けた谷崎は、大阪の芸能に詳しい知り合いの新聞記者に習いたいと漏らしたところ、地唄の名手・菊原琴治検校を紹介された。谷崎は唄の稽古を希望していたようだが、唄と三味線は一緒に習うものという菊原検校の強い意志があり、唄と三味線の手ほどきを受けることとなった。谷崎の末弟・終平の回想によると、谷崎は「繰返し繰返し同じ手を飽きずに練習」し、遂にマスターするという真面目で実直な稽古ぶりであったという。神戸岡本の自宅に出稽古をお願いし、熱心に励むその姿は、いわゆる旦那芸ではないと検校を喜ばせた。

こうして音曲の手ほどきを受けた経験は、昭和の名作「春琴抄」（1933年）へと結実した。春琴は、盲目の天才音曲師として描かれる

が、芸に邁進した彼女が奏でる「精妙な撥の音」を聴いた弟子たちに、あの三味線には仕掛けがしてあるのではないかと不審に思われる場面がある。そうした天賦の才能を示す春琴のエピソードは、菊原検校の実話に拠ったものとされている。と同時に、美しくも驕慢な春琴と、彼女を献身的に支える佐助という二人の特殊な主従関係は、のちに三度目の妻となる松子夫人との、秘めた恋愛を反映している。

珠玉の名作は、実在する天才音曲師と、谷崎の恋愛を背景に生まれたのであった。



「三味線を弾く谷崎」

芦屋市谷崎潤一郎記念館 永井 敦子



「谷崎愛用の京三味線」

芦屋市谷崎潤一郎記念館

当館は1988（昭和63）年の開館から35年を経た2023年4月に機械設備等の改修工事を終え、リニューアルオープンを迎えた。4月15日にはリニューアルオープンの式典が隣接する芦屋市立美術博物館とともに開催され、約100人の関係者が出席した。

新たなアプローチとして、ロビーに大型モニターが設置され、谷崎の人となりや生涯、谷崎と芦屋のつながりを知ることのできる映像が常時ご覧いただける。

谷崎記念館だより

vol.5 2023

ただけるようになった。また、お手洗いは谷崎潤一郎の随筆「陰翳礼讃」の世界が感じられる空間へ一新。

当館の庭園は谷崎が一時居住した京都・潺湲亭（現・石村亭）の庭を模しているが、庭、展示室、ロビー、お手洗い、それぞれの空間が響き合い、より谷崎潤一郎の世界が体感できる場所へと生まれ変わっている。名作「細雪」の舞台ともなった芦屋で、谷崎文学の妙味を感じていただきたい。

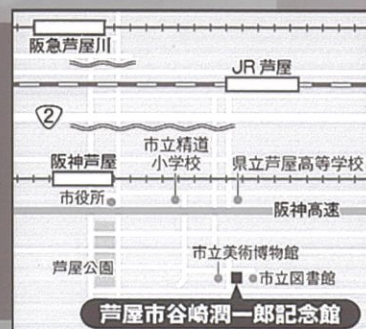
谷崎記念館だより 2023

2024年3月1日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP: <https://www.tanizakikan.com/>

交通

徒歩 阪神芦屋駅から南東へ15分

バス 阪急芦屋川駅・JR芦屋駅・阪神芦屋駅

いずれも「緑町」下車、東へ徒歩1分

駐車場 隣の美術博物館 20台、図書館 47台